

第9章 施設の老朽化対策

第1節 現状と課題

1. 耐震化が必要な施設の現状

安来市立病院は、本館、新館、別館の順に増築を行ってきたが、本館は、昭和45年に建設され、築46年となっている。

その本館は3階建であり、1階には救急処置室・休日夜間診察室・外来診療科（小児科・眼科・耳鼻咽喉科・皮膚科等）・受付・会計・レントゲン室・薬剤室・給食調理室等、2階には外来診療科（外科・婦人科等）・人工透析室・健診室・臨床検査室等、3階には手術室等を配置しており、病院の主要な機能を有している。

安来市建築物耐震改修促進計画の中で、平成27年度における耐震化率の目標を市有建築物（特定建築物）は95%としていたことから、平成23年度に耐震診断を実施した結果、本館1階の耐震強度が不足していることが判明し、その対応が求められている。

本館の耐震診断結果は以下の通り

項目	I S X軸	CTU×SD	I S Y軸	CTU×SD
3階	1.24	1.27	1.30	1.32
2階	0.83	0.85	0.97	0.98
1階	0.65	0.66	0.49	0.50
最小値	0.65	0.66	0.49	0.50

安来市立病院については、震度5強程度の中規模地震に対して損傷が生じることや倒壊する恐れは少ないとされている。

構造耐震指標（I S X軸・Y軸）値とは耐震診断により、建物の耐震性を示す指標で、I S値が0.6以上（震度6強程度の大規模地震に対して人命に危害を及ぼすような倒壊等の被害を生じない程度の耐震性）で新耐震基準を満たすとされている。

CTU×SD値とは、建物に強度を確保する目的の累積強度（CTU）の指標や、建物の形状（SD）の指標に関する判定基準で、CTU×SD値が0.3以下ではI S値を満たしていても安全とされない。

ただし、これらの数値は耐震性を満たす最低限の数値であることから、目標値を次の数値としている。

目標値：I S 値 0.75 以上、CTU・SD 値 0.375 以上。

2. 耐震化に向けた課題

耐震強度不足の対応として耐震補強工事が必要となるが、本館は病院機能の主要機能を有していることから、工事施工上の問題点として、診療時間に配慮した工事を行う必要があること、工事中的影響範囲の機能が停止する可能性があること、工事期間中は仮設建物の設置が必要と考えられること等が挙げられる。

また、本館自体が老朽化しており、大規模な修繕は可能な限り先送りしている状況であり、耐震補強工事を行う場合は併せて大規模な修繕が必要と考えられる。

第2節 施設更新の検討

1. 今後検討する内容

(1) 施設更新の選択肢

安来市全体の医療提供体制を考えるなかでの安来市立病院に必要とされる医療機能及び規模を考慮し、耐震化又は建替えを検討する必要がある。

① 本館の耐震化

本館の耐震補強工事を行う。

耐震化に向けた課題を踏まえると、本館の継続利用を前提とした耐震補強工事は、老朽化した本館の今後の利用可能年数と、工事等の費用負担を考え、その投資対効果について慎重に判断する必要がある。

② 耐震強度が不足している本館の建替え（新館及び別館は継続利用）

必要最小限の建替えとするため、本館のみ建替えを行う。

課題としては、新館及び別館と隣接している必要があり、現在所有する土地の範囲内で建替えを想定するが、それが不可能な場合は隣接した土地の取得等が必要となる。

③ 全面新築建替え

本館、新館、別館の順に増築を行ってきた安来市立病院は、その都度改修により必要な医療機能を確保しているが、医療機能・人・物の動線は非効率な部分がある。

また、平成5年に建設された新館、平成12年に建設された別館は、今後設備機器や配管関係の大規模な改修が想定される。

そのため、本館の建替えに併せて全面的に新築建替えを行う。

課題としては、多額の経費が必要となることが最大の課題となる。

また、建設地についての選定が必要となる。

(2) 財政面の検討

病院の建替えには多額の経費が必要であるが、平成27年度安来市病院事業会計決算において資金不足が発生している状況であり、現在の財政状況では、老朽化対策への投資が困難な状況である。

整備には大きな財政負担を伴うことから、市民・議会の理解を得て進める必要がある。